報告要旨

グローバル生産システムと貿易構造

—「経済のグローバリゼーションと貿易構造」に関連してー

九州大学大学院経済学研究院

石田修

バリューチェーンやネットワークを包摂したグローバル生産システムとは、グローバル化した産業連関である。しかし、生産システム分析は以下の点で、マクロの産業連関分析とは異なる独自の視点を提示する。まず、第１に、産業連関は物的および価値的側面から見た投入産出関係を対象としているのに対して、知識ストックと情報フローに焦点を当てるという点で異なる。生産システム分析では、企業の知識ストックの相違、バリューチェーンやネットワークにおける企業間の情報共有の程度の相違が、企業間（バリューチェーンやネットワークの）構造を規定する要因として扱われる。第２に、企業関係が形成するパワーバランスや階層構造を分析対象とするということである。そのなかには、もちろんガバナンス形態も含まれる。このような、企業間（バリューチェーンやネットワークの）構造は、知識ストックや情報フローの視点を密接に関わる。第３に、重層的な協調関係と競争関係を分析する点で異なる。分析単位は産業ではなく、企業、バリューチェーンであり、企業間やバリューチェーン内部、そして、バリューチェーン間の関係に注目するということがメゾの視点である。第４に、純生産（付加価値）ではなく、価値獲得と価値創造の乖離を対象とする。限界理論のように、所与のストックの「配分」の効率性ではなく、産業連関分析のように純生産物・純付加価値が形成されるフロー分析であるが、その上に、純付加価値形成過程のなかで価値獲得と価値創造過程を分けて考察することに特徴がある。

また、生産システム分析では、経営学とミクロ経済学の二つの学問視点を利用し、メゾの領域を複眼的に分析するという特徴をもち、生産システムの分析のメゾの視点ではないと分析できない独自の領域であることも確認する必要がある。

　さらに、生産システム分析は、ある一面では、生国際貿易分析を包摂している。つまり、国際貿易活動の全体というよりも、その一部である中間財や資本財の貿易に比重をおいた貿易分析である。最終消費財の取引とは、消費者に対して一回限りの取引であるのに対して、中間財の貿易は連続性・継続性を必要とする取引である。したがって、中間財や資本財の国際貿易は、空間的に分離し多数の国境を跨いだグローバル生産システムを統合する経済活動であるといえる。